

A.G. 2018年卒 地域マネジメントコース

こんな学生時代を過ごしました

私は大学時代、421Lab.の中にある東日本大震災関連プロジェクトに参加していました。半年に一度、東北を訪れて仮設住宅で暮らす方のお話をうかがったり、復興に力を注ぐ人たち取材したりしていました。その内容はスターフライヤーの機内誌として記事化することもあり、とてもやりがいのある活動でした。

また、震災支援で学んだ知識や経験を活かして、熊本地震や九州北部豪雨の際には、災害ボランティアセンターの運営を行うなど、実際の被災地での支援にも多く関わりました。

さらに、北九州市名物の「焼うどん」と岩手県釜石市の名産「イカ」を掛け合わせた「絆焼うどん」という商品を学生で開発しました。市内のお祭り等で販売し、売り上げの一部を東北に寄付する“食べて応援する支援”として継続することができました。授業やゼミ活動だけでなく、「全国公立大学学生大会」で九州・沖縄代表として企画運営に携わったり、授業で取得した「障がい者スポーツ指導員」の資格をきっかけに平昌パラリンピックを観戦しに行ったりと、4年間で本当に幅広い経験を積みました。振り返ると学生らしからぬほど忙しい日々でしたが、とにかく動き続けた時間がとても充実していたと感じます。

災害が発生した際、すぐに動けるように日頃から準備し、学外の学生ネットワークを作っていたことで、「いざという時に動ける学生」として評価され、社会福祉協議会から正式に依頼を受ける機会も得ることができました。

学内にとどまらず外にも積極的に飛び出していたからこそ、社会人になってからも地域の方々に声をかけてもらえたり、災害支援の場面で頼っていただけたりするつながりが生まれたのだと今振り返ると感じるものがたくさんあります。

行動力を武器に多くの経験を積み、地域とつながり続ける力を育んだ4年間でした。



宮城県の仮設住宅に住む方と被災当時の話をしたり、昨日のご飯の話をしたりと心に寄り添う在り方も学びました。この写真は私が大好きな写真の一つです。

卒業後こんなキャリアを歩んでいます

卒業後、学生時代の災害支援活動がきっかけとなり北九州市役所に入職しました。最初は「公務員の仕事は堅いのかな」と思っていたのですが、実際は市民の生活すべてを支える“総合商社”のような場所で、幅広い分野の仕事に挑戦できる環境でした。災害時には避難所の開設に関わったり、久留米市で豪雨が発生した際には派遣職員として家屋の浸水度調査を担当するなど、現場での業務も経験しました。

日常業務では、市民に身近なスポーツ大会の運営や、保育所の入所手続き、人事管理など、さまざまな部署で業務を担当しました。どの業務も、市民一人一人の生活に密接に関わっており、個々のニーズに応えることが求められます。現在は、市役所の業務をAIで効率化する役割を担っています。これは、前例がない挑戦でもあり、試行錯誤しながら進めています。新しい技術を導入し、既存の仕組みに合わせて最適化していくプロセスは、地域創生学群で学んだ「なければつくればよい」という姿勢そのものだと感じています。この姿勢は、どんな困難な状況にも対応できる力を育んでくれました。

それぞれの部署や市民の皆さんのニーズを丁寧に把握し、新しい仕組みを形にしていける。この積み重ねが、市全体のWell-beingを高めることにつながると信じ、やりがいを持って働いています。



現在も業務改革のハッカソンイベントでWSをしたり、人前で話したりと、学生時代の経験が活かれています。

現役生へのメッセージ

地域創生学群の学生でいられる4年間は本当に貴重です。その肩書きを遠慮なく使い、思い切り挑戦してください。学生時代に得た挑戦力と行動力は、社会人になったとき大きな強みになります。働きながら新しいことに挑むのは想像以上に難しいものです。だからこそ自由度の高い今、たくさん経験し、自分の未来のヒントを見つけてください。私自身、学生時代の災害支援が今の仕事につながりました。行動した分だけ道は広がります。皆さんにも素敵なご縁が訪れますように。